

ハスモンヨトウに対する薬剤の効果 ～ほ場ごとに薬剤の効果を確認しながら散布しましょう～

1. はじめに

ハスモンヨトウ（図1）はキャベツ、レタス、トマト、ピーマンなど多くの野菜類に発生し、葉や茎を食害する重要害虫です。本虫に対して本県ではこれまで薬剤による防除が一定の効果を示してきましたが、近年薬剤の効果が不十分とみられる事例が報告されています。こうした状況を踏まえ、県内複数地域で採集したハスモンヨトウの幼虫に対する主要薬剤の効果を評価しました。

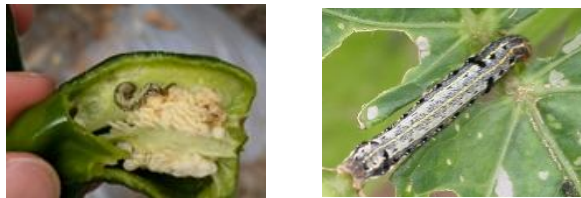


図1 ピーマンを食害するハスモンヨトウ中齢幼虫(左)と老齢幼虫(右)

2. 材料および方法

県内3地点（紀の川市：露地ナス、岩出市：露地ナス、御坊市：施設ピーマン）で2025年3～9月に採集したハスモンヨトウ幼虫を人工飼料で継代飼育し、2齢幼虫を試験に供しました。

試験は、食餌浸漬法（図2）により次の手順で行いました。まず、パクチョイの葉を直径5cmの円形に切り取り、表1に示す供試薬剤を水道水で所定濃度に希釈した薬液に30秒間浸漬しました。薬液には展着剤（グラミン0.02%）を加用し、水道水にも同様に加用して無処理区としました。浸漬したパクチョイは、風乾後、底面にろ紙を敷いたプラスチックシャーレに置き、各個体群の2齢幼虫5頭を放飼して25℃で保持しました。処理3日後に餌として無処理のパクチョイ葉片を2枚追加し、処理7日後に生死を判定しました。試験は6反復で実施し、処理7日後の生存数から補正死虫率を算出し、薬剤の

効果を比較しました。

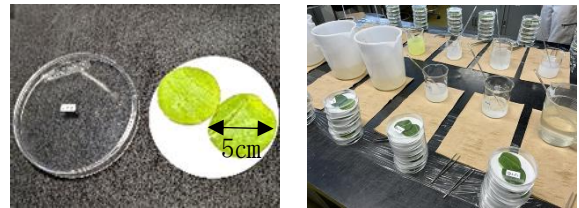


図2 食餌浸漬法の様子

3. 結果

7日後の補正死虫率を表1に示しました。

ディアナSC、アフーム乳剤、コテツフロアブル、マッチ乳剤、ファルコンフロアブル、トルネードエースDF、アクセルフロアブル、グレーシア乳剤はいずれの地域も高い効果を示しました。

一方、アディオン乳剤はすべての地域で効果が低く、デルフィン顆粒水和剤、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、ベネビアOD、プレオフロアブルは地域によって補正死虫率に差がみられ、十分な効果が得られない個体群も確認されました。

4. おわりに

今回の試験により、県内のハスモンヨトウでは一部薬剤に対する感受性の低下が認められ、ほ場によって薬剤の効果が異なることが明らかになりました。そのため、各ほ場で薬剤の効果を注視しながら防除を実施することが重要です。

また、効果が高い薬剤をできるだけ長く使えるようにするためには、作用機構（IRACコード）の異なる農薬をローテーションで使用し、同一系統薬剤の連用を避けることが有効です。

ハスモンヨトウの幼虫は中・老齢になると薬剤が効きにくくなるため、若齢期での早期防除を徹底しましょう。さらに、薬剤だけに頼るの

ではなく、防虫ネットの設置による成虫の侵入防止やほ場内外の雑草除去などを組み合わせる総合防除対策により本虫の密度抑制に努めてください。

(環境部 中野沙織)

表1 ハスモンヨトウ2齢幼虫に対する各種薬剤の補正死虫率(7日後)

供試薬剤 (IRACコード)	供試濃度	紀の川市	岩出市	御坊市
アディオソ乳剤(3A)	2,000	48.3	24.1	11.7
ディアナSC(5)	5,000	100.0	100.0	94.4
アフーム乳剤(6)	2,000	96.6	100.0	100.0
アニキ乳剤(6)	2,000	100.0	100.0	—
デルフィン顆粒水和剤(11A)	1,000	46.6	96.6	90.0
フローバックDF(11A)	1,000	—	82.8	83.3
コテツフロアブル(13)	2,000	100.0	100.0	100.0
マッチ乳剤(15)	2,000	100.0	100.0	100.0
ファルコンフロアブル(18)	4,000	100.0	100.0	100.0
トルネードエースDF(22A)	2,000	100.0	100.0	100.0
アクセルフフロアブル(22B)	2,000	100.0	100.0	100.0
フェニックス顆粒水和剤(28)	4,000	100.0	75.9	—
プレバソフロアブル5(28)	2,000	100.0	77.0	—
ベネビアOD(28)	4,000	100.0	100.0	35.8
ヨーバルフロアブル(28)	5,000	100.0	100.0	—
グレーシア乳剤(30)	2,000	100.0	100.0	100.0
プレオフロアブル(UN)	1,000	100.0	100.0	0.0

図中の—は未実施を示す。

太字は補正死虫率が80%以上、網掛けは補正死虫率80%未満(感受性が低いと判定)を示す。